

# 基調講演 「若者就職社会減の抑制なくして、地元人口の未来なし ～データで読み解く人口減少の真実と 県内企業・地域がとるべき戦略～」

株式会社ニッセイ基礎研究所 生活研究部 人口動態シニアリサーチャー  
あまの かなこ  
天野 馨南子 氏

## はじめに

こんにちは。ニッセイ基礎研究所の天野です。この度、40周年を迎えられたということでおめでとうございます。

ニッセイ基礎研究所は1988年、翌年に日本生命100周年を迎えるにあたり設立されたという経緯がございます。今年で設立37周年となりますので、徳島経済研究所さまの後輩といえるかもしれません。

今日は、忌憚なくお話をしたいとおうかがいしております。少々、厳しい数字が出てくるかと思いますが、あくまでも応援の気持ちでお伝えをさせていただきます。

私自身、祖父母が愛媛県松山市の出身でございまして、四国を本当に愛しております。この温暖な気候の中で、より多くの若者が幸せに働いてくれたら、という願いを込めて、お話をさせていただきます。



## 日本の人口減少

日本は移民比率が2%程度と低く、出生数の減少がそのまま人口減少に直結する、極めてシンプルな人口構造になっています。

よく聞かれる「合計特殊出生率」ですが、日本で人口を維持するのに必要な水準(人口置換水準)は、約2.07です。これが長期的に1.5を下回ると、人口回復が厳しくなると言われています。「長期的」とは、一世代分に相当する約30年を指しますが、日本は1995年に1.5を下回って以降、一度も回復していません。

移民比率が20%を超えるカナダのような国では、1.3を長期に下回ると人口回復が難しいと言われています。

2022年以降、日本の合計特殊出生率は1.3を下回り続けています。世界的に見ても「絶滅危惧種」レベルの厳しい状況と言えるでしょう。

## 徳島県における少子化の現状

人口減少の状況は、国ごとに違いがあるように、都道府県ごとにも違いがございます。実態を正しく知るには、合計特殊出生率ではなく、その地域で生まれる子どもの「実数」を見るのが重要となります。

では実際に、徳島の現状を見ていただきましょう。2023年の出生数は3,903人で、33年前の1990年の7,943人から、ほぼ半減しています。出生数減少率は50.9%で、人口減が深刻である東北・北海道エリア、高知、愛媛に続く形で全国ワースト12位となっています(図表1)。

図表1

1990年～2023年  
33年間  
出生数減少率  
都道府県  
ワーストランキング  
1～20位

母娘および世代間で見て  
徳島は全国で12番目の  
少子化度。1世代で出生  
数が半減。

| 順位 | 都道府県 | 1990   | 2023   | 減少率   | 出生数減少率 |
|----|------|--------|--------|-------|--------|
| 1  | 徳島県  | 16,992 | 8,611  | 48.3% | 41.5%  |
| 2  | 岩手県  | 14,254 | 6,432  | 54.9% | 41.2%  |
| 3  | 青森県  | 14,831 | 6,696  | 55.0% | 38.0%  |
| 4  | 徳島県  | 22,171 | 9,819  | 55.7% | 37.3%  |
| 5  | 山梨県  | 12,509 | 5,242  | 58.1% | 37.3%  |
| 6  | 山梨県  | 14,429 | 5,432  | 62.3% | 36.9%  |
| 7  | 徳島県  | 24,061 | 10,214 | 57.4% | 36.9%  |
| 8  | 鳥取県  | 16,517 | 7,296  | 55.6% | 36.1%  |
| 9  | 高知県  | 7,181  | 3,382  | 52.9% | 36.0%  |
| 10 | 徳島県  | 14,617 | 5,819  | 60.2% | 36.0%  |
| 11 | 山梨県  | 12,121 | 4,921  | 59.4% | 35.8%  |
| 12 | 徳島県  | 7,241  | 3,201  | 55.8% | 35.8%  |
| 13 | 徳島県  | 18,999 | 8,964  | 52.5% | 35.0%  |
| 14 | 高知県  | 7,524  | 3,759  | 50.1% | 34.9%  |
| 15 | 高知県  | 4,617  | 2,261  | 51.3% | 34.8%  |
| 16 | 徳島県  | 18,476 | 8,921  | 51.3% | 34.8%  |
| 17 | 徳島県  | 17,889 | 7,889  | 55.4% | 34.6%  |
| 18 | 山梨県  | 8,887  | 4,281  | 51.7% | 34.4%  |
| 19 | 徳島県  | 20,192 | 10,489 | 47.6% | 34.4%  |
| 20 | 徳島県  | 18,194 | 10,889 | 40.1% | 34.4%  |

一方、同じ期間の東京の出生数減少率は17.0%で、ワーストランキングでは全国47位でした。

合計特殊出生率が全国最下位である東京は、「少子化が深刻」と思われがちです。しかし、出生数減少率の状況を見ると、日本で最も「非少子化」の状態にある地域だと言えるでしょう。

実のところ、合計特殊出生率は、エリア間の女性人口移動の影響を受けやすいという特性があります。そのため、都道府県単位で少子化度合いを比較する場合、人流要因に左右されにくい「出生数」を見るのが重要となります。この点については、後ほど詳しくご説明します。

## エビデンスに基づく対策へ

次に、直近10年間の出生数減少率ワーストランキングを見てみましょう(図表2)。地方創生関連2法が施行されたのは2014年末ですので、地方創生が遅れている現状もご確認いただけるかと思えます。徳島の出生数は、10年前に比べて31.1%減少し、全国水準の29.4%を上回るスピードで少子化が進んでいます。

本表には、期間平均の合計特殊出生率(TFR)も併記しました。出生数減少率が徳島と同水準である京都に注目すると、出生数の減少速度は同じでも、合計特殊出生率では、京都が約1.255、徳島が約1.465と差があるのが分かります。

この差は一体何なのか、しっかり考えなければなりません。EBPM (Evidence-based Policy Making: エビデンスに基づく政策立案)という

言葉がありますが、政策は確かなエビデンス(根拠)に基づき、社会課題の本質的な解決を図るために講じる必要があります。

これまでの日本の少子化対策や人口減少対策は「とりあえず良さそうなことをしよう」という感覚対策ばかりです。統計データに対する不正確な認識や思い込みから脱却しなければなりません。そうした視点から、本日は、①出生減分析、②社会増減分析、③対策のポイント、といった3つの視点でお話をさせていただきます。

図表2 2013～2023年 出生数減少率  
都道府県ワーストランキング

| 少子化 worst | 都道府県 | 2013年     | 2023年   | 2023/2013 | 出生数減少率 (10年) | 期間平均TFR |
|-----------|------|-----------|---------|-----------|--------------|---------|
| 1         | 秋田県  | 6,177     | 3,611   | 58.5%     | 41.5%        | 1.289   |
| 2         | 岩手県  | 9,231     | 5,432   | 58.8%     | 41.2%        | 1.309   |
| 3         | 福島県  | 14,546    | 9,019   | 62.0%     | 38.0%        | 1.462   |
| 4         | 青森県  | 9,126     | 5,696   | 62.4%     | 37.6%        | 1.371   |
| 5         | 静岡県  | 30,260    | 18,969  | 62.7%     | 37.3%        | 1.446   |
| 6         | 山梨県  | 8,159     | 5,151   | 63.1%     | 36.9%        | 1.405   |
| 7         | 徳島県  | 15,588    | 9,958   | 63.9%     | 36.1%        | 1.380   |
| 8         | 新潟県  | 17,066    | 10,916  | 64.0%     | 36.0%        | 1.372   |
| 9         | 北海道  | 38,190    | 24,430  | 64.0%     | 36.0%        | 1.231   |
| 10        | 高知県  | 5,266     | 3,380   | 64.2%     | 35.8%        | 1.450   |
| 11        | 愛媛県  | 10,696    | 6,950   | 65.0%     | 35.0%        | 1.467   |
| 12        | 宮城県  | 18,949    | 12,328  | 65.1%     | 34.9%        | 1.245   |
| 13        | 大分県  | 9,665     | 6,259   | 65.2%     | 34.8%        | 1.553   |
| 14        | 岐阜県  | 16,000    | 10,469  | 65.4%     | 34.6%        | 1.449   |
| 15        | 三重県  | 14,514    | 9,524   | 65.6%     | 34.4%        | 1.461   |
| 16        | 宮崎県  | 9,854     | 6,502   | 66.0%     | 34.0%        | 1.675   |
| 17        | 長崎県  | 11,566    | 7,656   | 66.2%     | 33.8%        | 1.635   |
| 18        | 香川県  | 8,059     | 5,365   | 66.6%     | 33.4%        | 1.555   |
| 19        | 茨城県  | 22,358    | 14,898  | 66.6%     | 33.4%        | 1.385   |
| 20        | 山口県  | 10,705    | 7,189   | 67.2%     | 32.8%        | 1.526   |
| 21        | 鹿児島県 | 14,637    | 9,868   | 67.4%     | 32.6%        | 1.630   |
| 22        | 広島県  | 24,713    | 16,662  | 67.5%     | 32.5%        | 1.502   |
| 23        | 群馬県  | 14,732    | 9,950   | 67.5%     | 32.5%        | 1.406   |
| 24        | 鳥取県  | 5,534     | 3,759   | 67.9%     | 32.1%        | 1.657   |
| 25        | 奈良県  | 10,190    | 6,943   | 68.1%     | 31.9%        | 1.306   |
| 26        | 長野県  | 16,326    | 11,125  | 68.1%     | 31.9%        | 1.511   |
| 27        | 鳥取県  | 4,759     | 3,263   | 68.6%     | 31.4%        | 1.585   |
| 28        | 和歌山県 | 7,122     | 4,901   | 68.8%     | 31.2%        | 1.468   |
| 29        | 徳島県  | 5,666     | 3,903   | 68.9%     | 31.1%        | 1.465   |
| 30        | 京都府  | 20,166    | 13,882  | 69.0%     | 31.0%        | 1.255   |
| 31        | 熊本県  | 15,954    | 11,189  | 70.1%     | 29.9%        | 1.615   |
|           | 全国   | 1,029,817 | 727,288 | 70.6%     | 29.4%        | 1.367   |

資料：厚生労働省「人口動態調査」より天野氏作成

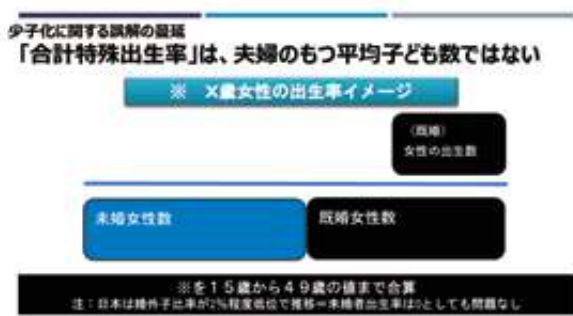
## 1. 徳島の「出生減」分析

### 少子化に関する誤解「合計特殊出生率」

出生減分析に入る前に、少子化にまつわる統計上の誤解を解きたいと思えます。というのも「合計特殊出生率は夫婦が持つ平均子ども数だ」という「誤解」が蔓延しているのです。

例えば、合計特殊出生率が2.0から1.3に下がると「母ちゃんが2人じゃなくて、1人ちょっとしか産まなくなったのか。それは駄目だ」と、おっしゃる方がいます。しかし、これは誤った統計の読み方です。合計特殊出生率とは、ある地域に住む15歳～49歳の「全女性」の年齢別出生率を足し上げたものです(図表3)。その母集団には、既婚女性だけでなく、未婚女性も含まれます。

図表3



日本は婚外子割合が2%と低く、計算上、未婚女性が生む子どもの数はほぼゼロと考えて問題ありません。そうすると、合計特殊出生率が低下する要因は、①未婚者割合の増加、②既婚者の持つ平均子ども数の低下、といった2点に絞られます。

ところが、これまでの少子化対策は、なんとなく①の「未婚者割合の増加」を見ずに、②の「既婚者が持つ子ども数」に注目してきました。そして「母ちゃんが産まない」と言って「母ちゃん応援プラン」ばかり打ち出してきた訳です。

### 「未婚女性の流入」で、出生率は低下する

しかしながら、母集団の未婚女性の割合が増えれば、既婚女性が産む子どもの平均数が同じであっても出生率は低下します。

例えば、未婚女性と既婚女性がそれぞれ10人ずついるエリアで、既婚女性が子どもを5人産んだ場合、出生率は0.25となります。ここに、未婚女性がさらに10人加わったとしましょう。

既婚女性の産んだ子どもの数は同じでも、出生率は0.17まで下がってしまうことがわかります(図表4)。

だからこそ、出生率の低下要因については、①未婚者割合の増加、②既婚者の持つ子どもの数の減少、のどちら(またはどちらも)なのか、を検証する必要があります。

図表4



### 初婚同士の夫婦当たり出生数は増加している

では、徳島における出生率の低下要因を検証してみましょう。図表5をご覧ください。

1970年の出生数は11,852人でしたが、2023年は3,903人まで減少しました。わずか半世紀で、1970年時点の33%の水準まで下落しています。その減少率は▲67%で、全国平均の▲60%を上回っています。

次に、夫婦当たりの出生数を見ると、1970年の1.9人に対し、2023年は1.7人と、1970年時

図表5 徳島県の出生減分析

| 徳島県              | 出生数    | 婚姻数   | 出生/婚姻(人)<br>→夫婦当たり出生数 | 初婚同士<br>婚姻数                   | 出生/初婚(人)<br>→初婚同士<br>夫婦当たり出生数 |
|------------------|--------|-------|-----------------------|-------------------------------|-------------------------------|
| 1970             | 11,852 | 6,215 | 1.9                   | 5,525                         | 2.0                           |
| 1975             | 12,020 | 6,186 | 1.9                   |                               |                               |
| 1980             | 10,544 | 5,241 | 2.0                   |                               |                               |
| 1985             | 9,798  | 4,685 | 2.1                   |                               |                               |
| 1990             | 7,942  | 4,174 | 1.9                   |                               |                               |
| 1995             | 7,472  | 4,406 | 1.7                   |                               |                               |
| 2000             | 7,224  | 4,521 | 1.6                   |                               |                               |
| 2005             | 6,813  | 3,837 | 1.8                   |                               |                               |
| 2010             | 6,904  | 3,973 | 1.7                   |                               |                               |
| 2014             | 6,930  | 3,929 | 1.7                   |                               |                               |
| 2015             | 6,506  | 3,929 | 1.7                   | 3,313                         | 2.0                           |
| 2016             | 6,846  | 3,177 | 1.7                   | 3,297                         | 2.0                           |
| 2017             | 6,180  | 2,981 | 1.7                   | 3,176                         | 2.0                           |
| 2018             | 4,988  | 2,910 | 1.7                   | 3,092                         | 2.0                           |
| 2019             | 4,554  | 2,876 | 1.6                   | 3,076                         | 2.0                           |
| 2020             | 4,521  | 2,906 | 1.7                   | 3,062                         | 2.0                           |
| 2021             | 4,337  | 2,657 | 1.6                   | 3,344                         | 2.0                           |
| 2022             | 4,148  | 2,371 | 1.7                   | 3,246                         | 2.0                           |
| 2023             | 3,903  | 2,271 | 1.7                   | 3,674                         | 2.0                           |
| 2023/1970<br>減少率 | 33%    | 37%   | 90%                   | 30%                           | 109%                          |
| 出生数との相関係数        | 1.00   | 0.98  | 0.74                  | 0.94(15年から)<br>0.97(11年からの相関) |                               |
| 相関判定             | -      | 強相関   | 強相関                   | 強相関                           | 相関なし                          |

資料：厚生労働省「人口動態調査」より天野氏作成

点の90%の水準を維持しています。

さらに、夫婦のなかでも統計的に子どもを持つ傾向が高い「初婚同士」に限って見てみましょう。1970年の初婚同士夫婦当たり出生数(推計)<sup>(注1)</sup>は2.1人だったのに対し、2023年は2.3人まで増加しました。1970年時点の109%の水準まで増加しており、なんと半世紀前よりも多く子どもを産んでいることがわかります。

こうしたことから、徳島の少子化が「既婚者の子どもの数の問題ではない」ことは明らかです。夫婦当たりの出生数は、県全体的大幅な出生数減となんの相関関係もありません。徳島の「母ちゃん」はすごく頑張っているのに、「母ちゃんが産まなくなった」なんてことは、絶対言っていけないのです。

## 未婚者の増加により、出生数が減少

初婚同士夫婦1組あたりの子どもの数が増えた一方、初婚同士の婚姻数は半世紀で7割近く減少し、1970年時点の30%水準まで下落しました(図表5)。未婚者の増加が出生数の低下に直結しており、これこそが少子化の真犯人だと言えます。

「少子化で人口が減ったから、婚姻数も減ったのでは？」とおっしゃる方もいます。たしかに、合計特殊出生率の算出対象である15～49歳の女性人口(徳島)は、半世紀前の55%水準まで減少しました。しかし、婚姻数はそれ以上に深刻で、7割減となる30%水準まで急落しています。女性人口の減少を上回るペースで、婚姻数が減少しているのが現状です。

未婚率を見ても、その傾向は明らかです(図表6)。1970年において、50歳までに結婚していない人は数%しかいませんでした。しかし、2020

<sup>(注1)</sup>初婚同士夫婦当たり出生数の算出に当たっては、徳島の初婚同士婚姻数データが2015年以降しか国のオープンデータで確認できなかったため、1970年は全国水準(88.9%)を基に推計。

図表6



年は男性の4人に1人、女性の6人に1人が結婚していません。特に男性の未婚化傾向は、女性よりも顕著になっています。

こうしたことから「カップル成立なくして、出生なし」が、徳島の少子化の真因であるをご認識ください。

## 婚姻減は結婚意欲の低下が原因ではない

では、なぜ徳島でカップルが成立しなくなったのでしょうか。その原因を考える上で、「結婚したくない若者が大きく増えている訳ではない」ということもお伝えせねばなりません。

こちらは全国のデータになりますが、18～34歳の未婚男女の回答を見ると「いずれ結婚するつもり」が、8割を超えています。30年以上前と比べても、90%水準を維持しており、婚姻数の減少要因を結婚意欲の低下とするのは説明力不足であることがお分かりいただけます。

ちなみに、初婚同士のカップルのうち、男性は34歳までの方が8割、女性は9割を占めます。婚姻増に伴う出産増をめざすなら、この層

図表7



に重点を置くことも効果的です。

未婚率の上昇について「出会いがなくなった」との視点もあるでしょう。ただ、そもそも徳島から出て行く若者が多ければ、徳島のエリア内で婚姻なんて発生のしようがないのです。

ですので、ここからは出生減ではなく、徳島県の「社会減」についてお話しをしていきたいと思ひます。

## 2. 徳島の「社会減」分析

### 社会減で上昇する合計特殊出生率

社会減とは、地域内に入ってくる人数よりも、地域外へ出て行く人数が多くなり、結果的に人口が減少することを指します。

まずお伝えしたいのは、徳島のように社会減が深刻な地域では「合計特殊出生率が高いエリアほど、少子化対策が優秀とはいえない」ということです。

例えば、ある地域に未婚女性が100人、既婚女性が20人いたとします。既婚女性が子どもを10人産んだ場合、出生率は0.083になります。ここで、未婚女性がエリア外に転出し80人まで減少したと仮定しましょう。既婚女性の産んだ子どもの数は同じでも、出生率は0.1まで上昇します(図表8)。

このように、未婚女性が流出するだけで、少子化対策を何も講じなくても出生率が上がってしまうのです。

図表8



逆に、東京や神奈川などのエリアは、他県から未婚女性が大量に流入するため、少子化対策とは関係なく出生率が下がる傾向があります。

実際に、東京と徳島の出生数減少率(2013～2023年)を比較してみます。東京が21.5%減と全国で最も「非少子化」の状態であるのに対し、徳島は31.1%減と、全国平均の29.4%よりも少子化が進んでいる状態です。

一方、同期間の合計特殊出生率は、東京が1.14、徳島が1.47で、徳島の方が高くなっています。都道府県別の合計特殊出生率と出生数の増減率に相関関係はなく「都道府県ごとの少子化度合いは、合計特殊出生率の高低で判断できない」と言えます。

現在、多くの自治体が、合計特殊出生率を少子化対策の指標にしています。実際の子どもの数が他自治体よりも大きく減っているにも関わらず、出生率の高さだけを見比べて楽観視してしまうケースも多々見受けられます。一方で、この誤解を正しく認識し、合計特殊出生率を目標指標から外す自治体も出てきています。

### 社会減で負ければ、自然減でも負ける

図表9は、都道府県別の社会増減率と自然増減率の関係を示しています。自然増減とは、出生数から死亡数を引いた差のことです。

これを見ると、社会増減率と自然増減率には強い相関関係があり、社会減が深刻な地域では自然減も深刻だということが分かります。

図表9



社会減には、2つのパターンがございます。①若者が出て行く場合と、②高齢者が出て行く場合です。現状の日本は①の傾向が見られ、特に若い女性が出ていく地域ほど、婚姻数や出生数が減少し、結果的に自然減が進んでいます。

図表9では「社会減で負けた結果、自然減でも負けている地域」を黄色で強調しています。出生数減少率のワーストランキング上位勢である東北エリアと共に、徳島もこうした地域に含まれていることが分かります。

## 徳島における「社会減」の現状

ここまで、出生数の増減は社会増減と強く関連していることをお伝えしてきました。では、徳島でどれほど社会減(転居に伴う人口減)が進んでいるのか、現状を見ていきましょう。

図表10は、コロナ禍前の10年間(2010～2019年)における社会減ランキングです。この10年間で、徳島では18,939人の社会減が発生しています。特に、女性は男性の1.31倍、県外へ流出しています。こうした認識を皆さんはお持ちでしたでしょうか。

気づきにくいのも無理はありません。男性のUIターンが一定数ある一方、女性は一度出るとほとんど戻らないため、地元の方が地域からの流出を実感する機会が少ないのです。

ただ、この数年間で男女差はより顕著になっています。コロナ禍後の4年間(2020～2023年)では女性の流出傾向が強まり、男性の1.54倍も県外へ流出するようになっています。

図表10



## 「雇用綱引きの敗北」により、出生減は加速する

では、具体的にどの年齢層が出て行っているのかを確認してみましょう。図表11は、年齢別の社会減状況を示しています。これを見ると、社会減が20代前半に集中していることは一目瞭然です。特に、20代前半女性の社会減数は1,039人と、同年代の男性の1.4倍にのぼります。ここが、この講演の大きなポイントです。

図表11



仮に、流出した女性たちが全国平均(約8割)と同様の結婚意欲を持ち、徳島の初婚同士夫婦と同じ平均子ども数(2.3人)を産むとすると、徳島は年間約1,912人の出生数を失っている計算になります。年間出生数が3,900人規模の徳島にとって、この状況が毎年繰り返されていることは非常に大きな損失です。

就職期を迎える20代前半、特に女性の流出が激しいということは、他県に「雇用綱引きで負けている」証拠です。「地方創生」という言葉をよく聞きますが、この状況を見ると地方こそ「若者の雇用」に本気で取り組むべきではないでしょうか。このグラフを見れば、もはや他の施策を置いてでも若者の雇用対策に全力を注ぐべきだ、と思えるほどです。

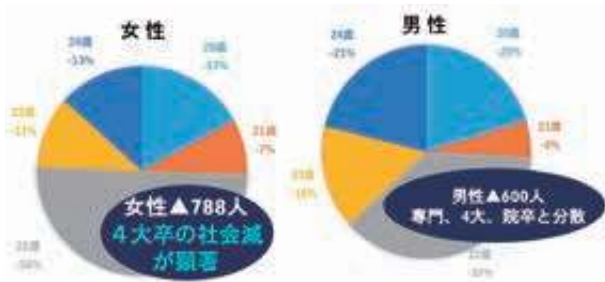
## 男女関係なく「残りたい」と思う雇用環境がない

図表12(次頁)は、徳島の若者が20～24歳のどのタイミングで、地域から出て行っているのか、を示しています。男性は、専門学校卒業

時(20歳)、4年制大学卒業時(22歳)、大学院卒業時(24歳)と、分散して流出しています。一方、女性は4年制大学卒業時(22歳)での流出が全体の半数を占めており、その男女差は顕著です。

徳島は、全国的にも女性の大学進学率が高い地域として知られています。このグラフを見ると、進学における男女差が僅差となった令和においても、徳島には若者が男女を問わず「残りたい」と思える雇用環境が整っていないことが示唆されていると言えるでしょう。

図表 12 県内の年齢・男女別社会減状況(20～24歳)



## 消滅可能性自治体は、「女性が就職で出て行く自治体」

10年前、そして2024年に発表された「消滅可能性自治体」は、言葉だけが一人歩きしているように思います。その本来のポイントは、「若年女性人口が2020年の国勢調査時点から2050年までに半数以上減ると、その地域の人口は維持できない」という点にあります。母と娘の間のわずか一世代間で20～30代女性人口が半分未満に減っちゃうようなエリアでは、もう人口を維持することは無理だよ、ということです。

徳島の現状を見ると、24市町村中16市町村が消滅可能性自治体の対象となっており、その割合は全国8位と高い水準にあります。

先ほど、就職期を迎える20代の流出が顕著だとお伝えしました。その一方で徳島の30代はほとんど流出していません。20代の就職による県外流出が問題であることは明らかです。

ここでしっかりと「就職で女性が出て行く自

治体が消滅可能性自治体である」と読み替える必要があります。就職で出て行く「20代女性」の人口維持力こそが、地域の未来を左右するので

## 昨年の女性社会減割合は、全国ワースト3位

図表13～15は、2022年の20代人口のうち、翌年の2023年にどれだけの若者が県外へ出て行ったかを示しています。徳島は男女計で全国ワースト5位でしたが、男性はワースト14位、女性はワースト3位と、男女で差が開きました。

図表15を見て、「女性の社会減割合(徳島)は3.8%だから、96.2%は残ってくれている」と考える方もいらっしゃるかもしれませんが。

しかし「雨だれ石を穿つ」とも言うように、約4%のマイナスが続けば、非常に大きな損失となります。同じ状況が10年続くと仮定すると、20代人口が10年で10年前の約4割も社会減するという計算になります。さらに今後、少子化により母数となる20代人口自体も減少が進むため、このままでは人口減少は加速する一方です。

そうした意味で、このワーストランキングは「20代女性の県外流出に対する危機意識が低すぎるランキング」だとも言えます。この危機意識をしっかりと持ってもらわないと、人口減少の負のループから抜け出すことはできません。

これはジェンダーのお話ではなく、人口問題に関するお話です。生物学的に子どもの出生に大きく関わる女性を失って、どうやって地域内の出生数を増やすのか、というお話なのです。

図表 13 2023年・対前年20代人口社会増減ワーストランキング【男女計】

| ワースト | 都道府県 | 性別  | 2022年<br>20代推計人口 | 2023年<br>20代転入超過数 | 対20代人口<br>社会増減割合/年 |
|------|------|-----|------------------|-------------------|--------------------|
| 1    | 青森県  | 男女計 | 96,000           | -3,139            | -3.26%             |
| 2    | 茨城県  | 男女計 | 103,000          | -3,260            | -3.16%             |
| 3    | 福井県  | 男女計 | 85,000           | -3,029            | -3.56%             |
| 4    | 山梨県  | 男女計 | 81,000           | -3,171            | -3.91%             |
| 5    | 徳島県  | 男女計 | 58,000           | -2,201            | -3.79%             |
| 6    | 徳島県  | 女性  | 145,000          | -5,469            | -3.77%             |
| 7    | 徳島県  | 男性  | 60,000           | -2,691            | -4.48%             |
| 8    | 兵庫県  | 男女計 | 98,000           | -2,979            | -3.04%             |
| 9    | 奈良県  | 男女計 | 116,000          | -2,919            | -2.51%             |
| 10   | 大分県  | 男女計 | 92,000           | -2,691            | -2.92%             |
| 11   | 山口県  | 男女計 | 107,000          | -2,119            | -1.97%             |
| 12   | 和歌山県 | 男女計 | 69,000           | -2,091            | -3.03%             |
| 13   | 香川県  | 男女計 | 78,000           | -2,229            | -2.84%             |
| 14   | 高知県  | 男女計 | 52,000           | -1,469            | -2.82%             |

資料：総務省「住民基本台帳人口移動報告」より天野氏作成

図表 14 2023 年・対前年 20 代人口社会増減  
ワーストランキング【男性】

| Worst | 都道府県 | 性別 | 2022年<br>20代推計人口 | 2023年<br>20代転入超過数 | 対20代人口<br>社会増減割合/年 |
|-------|------|----|------------------|-------------------|--------------------|
| 1     | 徳島県  | 男性 | 57,000           | -7,011            | -1.2%              |
| 2     | 山形県  | 男性 | 41,000           | -7,257            | -1.8%              |
| 3     | 茨城県  | 男性 | 54,000           | -7,811            | -1.5%              |
| 4     | 青森県  | 男性 | 48,000           | -1,418            | -2.9%              |
| 5     | 福井県  | 男性 | 35,000           | -988              | -2.8%              |
| 6     | 和歌山県 | 男性 | 38,000           | -1,000            | -2.6%              |
| 7     | 福島県  | 男性 | 78,000           | -2,140            | -2.7%              |
| 8     | 大分県  | 男性 | 48,000           | -1,311            | -2.7%              |
| 9     | 埼玉県  | 男性 | 48,000           | -1,297            | -2.7%              |
| 10    | 三重県  | 男性 | 84,000           | -2,252            | -2.7%              |
| 11    | 千葉県  | 男性 | 137,000          | -3,332            | -2.4%              |
| 12    | 岐阜県  | 男性 | 32,000           | -811              | -2.5%              |
| 13    | 北海道  | 男性 | 69,000           | -1,152            | -1.7%              |
| 14    | 徳島県  | 男性 | 31,000           | -757              | -2.4%              |
| 15    | 鹿児島県 | 男性 | 28,000           | -680              | -2.4%              |
| 16    | 山口県  | 男性 | 58,000           | -1,311            | -2.3%              |
| 17    | 岡山県  | 男性 | 98,000           | -2,220            | -2.3%              |
| 18    | 山形県  | 男性 | 43,000           | -1,007            | -2.3%              |
| 19    | 石川県  | 男性 | 60,000           | -1,371            | -2.3%              |

図表 15 2023 年・対前年 20 代人口社会増減  
ワーストランキング【女性】

| Worst | 都道府県 | 性別 | 2022年<br>20代推計人口 | 2023年<br>20代転入超過数 | 対20代人口<br>社会増減割合/年 |
|-------|------|----|------------------|-------------------|--------------------|
| 1     | 青森県  | 女性 | 47,000           | -1,122            | -2.4%              |
| 2     | 岩手県  | 女性 | 28,000           | -788              | -2.8%              |
| 3     | 徳島県  | 女性 | 27,000           | -1,030            | -3.8%              |
| 4     | 愛知県  | 女性 | 24,000           | -710              | -2.9%              |
| 5     | 福井県  | 女性 | 30,000           | -1,100            | -3.7%              |
| 6     | 山形県  | 女性 | 42,000           | -1,530            | -3.6%              |
| 7     | 岐阜県  | 女性 | 28,000           | -1,020            | -3.7%              |
| 8     | 山口県  | 女性 | 57,000           | -1,800            | -3.2%              |
| 9     | 茨城県  | 女性 | 50,000           | -1,750            | -3.5%              |
| 10    | 福島県  | 女性 | 67,000           | -2,100            | -3.1%              |
| 11    | 山形県  | 女性 | 38,000           | -1,200            | -3.2%              |
| 12    | 鳥取県  | 女性 | 22,000           | -680              | -3.1%              |
| 13    | 大分県  | 女性 | 44,000           | -1,310            | -3.0%              |
| 14    | 和歌山県 | 女性 | 34,000           | -980              | -2.9%              |
| 15    | 千葉県  | 女性 | 128,000          | -3,550            | -2.8%              |
| 16    | 新潟県  | 女性 | 82,000           | -2,180            | -2.7%              |
| 17    | 山形県  | 女性 | 36,000           | -1,020            | -2.8%              |
| 18    | 鳥取県  | 女性 | 24,000           | -680              | -2.8%              |
| 19    | 岐阜県  | 女性 | 88,000           | -2,180            | -2.5%              |
| 20    | 北野県  | 女性 | 77,000           | -2,050            | -2.7%              |

資料(図表 14、15)：総務省「住民基本台帳人口移動報告」より天野氏作成

## 人口減の負のループから抜け出すには

これまでの話をまとめましょう。徳島県は男性より女性の県外流出が激しいこと、そしてそれが就職期に集中していることに対処せねば、人口減の負のループからは抜け出せません。これこそが、「社会減(過疎化・消滅可能性上昇)の正体」です。

では、どのように対処していけばいいのでしょうか。今日お越しいただいた皆さまには、6つのポイントをお話しできればと思います。

**ポイント①**  
激変した若者(息子・娘)世代の家族価値観を  
経営者が痛感すること

### ■若者世代が望むライフコースを知る

若者の理想の家族像は、この 34 年間で大きく変わりました。国立社会保障人口問題研究所の調査結果(図表 16)から、その変化を見てみましょう。

1987 年の調査時には、男性の 37.9% が「専業主婦妻が理想」としていました。「働く夫が主役で、妻は家事育児などサブ的労働で支える」との価値観が一般的だった時代でした。ここで回答した世代は、現在 55～71 歳。つまり、今の親世代であり、経営者や管理職、政治家などの意思決定を担う立場にある世代です。

ところが、いまの若者(息子)世代で「専業主婦が理想」と答えた男性は、6.8% と圧倒的に少数派です。「再就職妻(一度退職し、子育て後に再就職)が理想」も 29.0% に留まります。

女性も母親世代では「専業主婦が理想」が 33.6% で多数派でした。「両立が理想」も、18.5% しかありませんでした。しかし、娘世代になると「両立が理想」は 34.0% まで増加しています。

こうした結果を見ると、若者世代の多くが「夫婦共働きで経済的に支え合う」家庭像を理想としていることが分かります。

私は親世代に近い年齢ですが、当時の 4 年制大学進学率は男性で 34.5%、女性で 16.1% と、進学時の男女格差が激しい時代でした。そのため、

図表 16 18～34 歳未婚男女の理想のライフコース

| 未婚男性の回答             |                              |                     |                               |      |  |
|---------------------|------------------------------|---------------------|-------------------------------|------|--|
| パートナーの理想の<br>ライフコース | 第9回調査(1987)<br>2024年現在55-71歳 | パートナーの理想の<br>ライフコース | 第16回調査(2021)<br>2024年現在21-37歳 | 変化pt |  |
| 1 再就職妻理想            | 38.3                         | 1 既立妻理想             | 26.4                          | 29.3 |  |
| 2 専業主婦妻理想           | 37.9                         | 2 再就職妻理想            | 29.0                          | -9.3 |  |
| 3 不詳+その他            | 11.9                         | 3 不詳+その他            | 12.7                          | 0.8  |  |
| 4 既立妻理想             | 10.5                         | 4 専業主婦妻理想           | 6.8                           | -3.7 |  |
| 5 再就職妻理想            | 0.8                          | 5 再就職妻理想            | 6.5                           | 5.7  |  |
| 6 DINKS理想           | 0.7                          | 6 DINKS理想           | 5.5                           | 4.8  |  |

| 未婚女性の回答          |                              |                  |                               |      |  |
|------------------|------------------------------|------------------|-------------------------------|------|--|
| 自分の理想の<br>ライフコース | 第9回調査(1987)<br>2024年現在55-71歳 | 自分の理想の<br>ライフコース | 第16回調査(2021)<br>2024年現在21-37歳 | 変化pt |  |
| 1 専業主婦妻理想        | 33.6                         | 1 既立妻理想          | 34.0                          | 15.3 |  |
| 2 再就職妻理想         | 33.1                         | 2 再就職妻理想         | 26.1                          | -7.0 |  |
| 3 既立妻理想          | 18.5                         | 3 専業主婦妻理想        | 13.8                          | -4.7 |  |
| 4 不詳+その他         | 10.7                         | 4 再就職妻理想         | 12.2                          | 8.5  |  |
| 5 再就職妻理想         | 3.7                          | 5 DINKS理想        | 7.7                           | 9.2  |  |
| 6 DINKS理想        | 2.5                          | 6 不詳+その他         | 6.1                           | -4.6 |  |

資料：国立社会保障・人口問題研究所「第16回出生動向基本調査」より調査作成



専業主婦を理想とする価値観もある程度は理解できます。しかし現在は、男女間での学歴差がほぼない時代です。こうした環境で育った若者から「対等なのに、なぜ男性側だけが家計を支えなければならないのか」という疑問が生まれるのは、自然なことです。

少し視点は異なりますが、若者価値観の変化の背景には奨学金問題もごぞいます。進学率が上昇するなか、男女ともに奨学金を受給する学生が増えています。結婚や出産を機に妻が仕事を辞めたり、非正規に移ったりすると、夫が2人分の奨学金を背負うことになり、経済的にも大変なことになりますよね。

2020年の調査では、そうした若者の多くが40代までローンを抱えていることが分かっています。こうした状況では「仕事を辞めたくない、辞めてほしくない」となるのも当然です。

### ■若者の声が届く東京と、届かない地方

若者世代の価値観が大きく変容する一方で、日本の雇用制度には「男が仕事、女が家庭」という価値観が色濃く残っています。男女役割分業意識も根強いままです。

その背景には、日本の人口構造が深く関係しています。図表17は2020年の国勢調査の結果を基に、どの年齢層が人口マジョリティを占めているのかを都道府県別に示したものです。

全国平均では、人口が多い順に40代、50代、70代と続いています。20～30代に比べて圧倒的に40代以上の中高年人口が多く、政治や組織の意思決定において、若年層の声が届きにくい構造になっていると言えるでしょう。

特に徳島の場合、60代、70代、40代の順に人口が多くなっており、全国より高齢層人口の割合が高くなっています。

こうしたことから、徳島は全国と比べて、より古い価値観を持ちやすい人口構造にあることが分かります。

図表17

人口マジョリティ世代1～3位（2020年国勢調査）

| 都道府県 | 最も多い | 次に多い | 3番目に多い | 都道府県 | 最も多い | 次に多い | 3番目に多い |
|------|------|------|--------|------|------|------|--------|
| 全国   | 40代  | 50代  | 70代    | 三重県  | 40代  | 70代  | 50代    |
| 北海道  | 60代  | 70代  | 40代    | 滋賀県  | 40代  | 50代  | 70代    |
| 青森県  | 60代  | 70代  | 50代    | 京都府  | 40代  | 70代  | 50代    |
| 岩手県  | 60代  | 70代  | 40代    | 大塚野  | 40代  | 50代  | 70代    |
| 宮城県  | 40代  | 60代  | 50代    | 兵庫県  | 40代  | 70代  | 50代    |
| 秋田県  | 60代  | 70代  | 50代    | 奈良県  | 70代  | 40代  | 50代    |
| 山形県  | 60代  | 70代  | 40代    | 和歌山県 | 70代  | 60代  | 40代    |
| 福島県  | 50代  | 40代  | 70代    | 鳥取県  | 50代  | 70代  | 40代    |
| 茨城県  | 40代  | 60代  | 70代    | 島根県  | 70代  | 50代  | 40代    |
| 栃木県  | 40代  | 60代  | 70代    | 岡山県  | 40代  | 70代  | 50代    |
| 群馬県  | 40代  | 70代  | 50代    | 広島県  | 40代  | 70代  | 50代    |
| 埼玉県  | 40代  | 50代  | 70代    | 山口県  | 70代  | 60代  | 50代    |
| 千葉県  | 40代  | 50代  | 70代    | 徳島県  | 60代  | 70代  | 40代    |
| 東京都  | 40代  | 50代  | 30代    | 香川県  | 70代  | 60代  | 40代    |
| 神奈川県 | 40代  | 50代  | 70代    | 愛媛県  | 70代  | 60代  | 40代    |
| 新潟県  | 60代  | 70代  | 40代    | 高知県  | 70代  | 60代  | 40代    |
| 富山県  | 70代  | 40代  | 50代    | 福岡県  | 60代  | 40代  | 70代    |
| 石川県  | 40代  | 70代  | 50代    | 佐賀県  | 60代  | 40代  | 70代    |
| 福井県  | 40代  | 70代  | 50代    | 長崎県  | 60代  | 70代  | 50代    |
| 山梨県  | 50代  | 40代  | 70代    | 熊本県  | 60代  | 70代  | 40代    |
| 長野県  | 40代  | 70代  | 50代    | 大分県  | 70代  | 60代  | 40代    |
| 岐阜県  | 40代  | 70代  | 50代    | 宮崎県  | 60代  | 70代  | 40代    |
| 静岡県  | 40代  | 70代  | 50代    | 鹿児島県 | 60代  | 70代  | 40代    |
| 愛知県  | 40代  | 50代  | 70代    | 沖縄県  | 40代  | 60代  | 50代    |

対して、地方から若者が流入し続けている東京では、40代、50代、30代の順に人口が多くなっています。30代がランキングに入るのは、全国でも東京だけです。統計上、30代は最も子を作りやすい年齢層となっています。その層の声が聞こえるのは、もはや全国でも東京だけなのです。今の若者世代に寄り添いやすい人口構造にある東京に、地方が負けやすいということは、お気付きいただきたいと思います。

だからこそ、データをしっかりと見ていただき「自分の時は～だった」と、自分サンプルだけで判断しないようにして欲しいのです。

**ポイント②**  
**首都圏企業の女性活躍推進努力が  
 突き抜けている状況を痛感すること**

### ■女性管理職比率が高い地方県ほど

#### 女性流出が顕著である「管理職パラドックス」

女性活躍という点では、徳島は女性管理比率が高いことで有名です。しかし、女性管理職が多いエリアの上位3位に10年以上入り続けている徳島、高知、2020年に3位に入った青森は、女性流出が顕著なエリアでもあります(図表18、15)。これは、「管理職パラドックス」と称してもいいかもしれません。

その矛盾を解く鍵となるのが、「企業規模」です。いずれの県も、企業総数に対して大企業は0.1%と圧倒的に少ないのに対し、小規模企業は86～88%と多数派です。

小規模企業や親族経営のファミリービジネス企業が多く、大企業が少ない場合、その地域内では女性を管理職にする決定がしやすくなります。その一方で、「名ばかり女性管理職」も生まれやすくなるでしょう。「名ばかり」というのは、女性活躍推進法に基づいて行動計画を出しているかどうか、ということです。

図表18



### ■理想家族像を実現しやすい「首都圏企業」

若者、特に女性の東京一極集中が加速した背景には、この「女性活躍推進法」と「えるぼし認定制度」が大きく影響しています。2016年に施行された女性活躍推進法は、企業に対し、女性の活躍状況を分析し、目標を設定した上で行動計画を策定・公表することを義務付けました。

これらの情報はネット上で全て公開されており、入社後のキャリアや家庭との両立のしやすさが可視化される時代が到来しています。こうした時代において、若者が自分の理想と異なる職場環境を選ぶ可能性は低いと言えます。

特に重要なのは、この行動計画の提出義務の範囲が企業規模によって異なる点です。以前は従業員301人以上の企業は全て提出、300人以下企業は「提出努力義務」が課されていましたが、2022年からは101人以上の企業の計画策定・公表が必須になりました(100人以下は提出努力義務)。

日本の大企業の約4割は東京に本社を構えており、必然的に行動計画を提出する企業も東京に集中しています。2023年3月末時点では、行動計画を提出した4万9,994社のうち、1万887社(22%)が東京の企業でした(図表19)。若者、特に女性が首都圏企業を選ぶ背景には、男女比の偏り是正に積極的で共働きしやすい企業が多いことが大きく影響していると言えます。

また、行動計画を有限実行した企業には「えるぼし」、特に実施状況が優れている企業には「プラチナえるぼし」の認定が与えられます。

2023年3月末時点で、えるぼし認定を受けた企業2,176社のうち1,090社(50%)、プラチナえるぼし認定を受けた企業37社のうち15社(41%)が東京の雇用者でした。ここからも「女性活躍推進に本気で取り組んでいる企業は東京に集中している」ことが明らかです。

図表19



こうしたことを背景に、東京一極集中における男女差はさらに拡大しています。東京の社会増の男女比を見ると、2011～2015年は女性が男性の1.2倍だったのに対し、2016～2019年は1.4倍、2020～2022年は2.2倍まで増加しました(図表20、次頁)。

特に、2020～2022年はコロナ禍で一極集中がやや緩和した時期でした。それにも関わらず、女性の東京流入への勢いが増しているという非常事態に陥っているのです。これまで見てきたように、首都圏企業の女性活躍推進努力は、目に見える形で突き抜けています。地方はこうした現実を直視する必要があるでしょう。

図表20



■提出対象になると、経営者の意識が変わる

対象企業の規模が301人から101人以上規模へと広がったことで、企業経営者の意識も変わりつつあります。最近実施したインタビュー調査では、千葉の製造業に転職された20代の女性から「男性ばかりの職場でしたが大歓迎され、非常に楽しく働いている」とうかがいしました。驚いたのは、その企業が従業員100人強ほどの規模だったことです。コロナ禍中に(行動計画の提出対象が101人以上となった際に)、その企業の社長が「これからわが社は女性採用を頑張るぞ!」と鶴の一声をあげ、採用のあり方を一変したといっています。

一方、従業員100人以下企業は、計画を提出しなくても問題にはなりません。例えば、従業員20人規模の企業が9割を占める愛媛では、行動計画の提出率が極めて低いのが現状です。

先ほど、後藤田徳島県知事から「高度人材を獲得できるよう、徳島でも企業規模を拡大していこう」とのお話がありました。これまでの流れを振り返ると、地方こそ、こうした意識を持つことが重要だと感じます。

**ポイント③**  
共働き夫婦の方が専業主婦世帯より  
子どもが多い事実を知ること

■共働き世帯は、「子2人・3人」割合が高い

こんな話をしていると「母ちゃんに働かれたら、子どもなんて産んでもらえないじゃないか」

と、とんでもないことを言う方がいます。ですが実際は、共働き夫婦世帯の方が専業主婦世帯よりも子どもが多いという事実をぜひ知っていただきたいと思います。

では、徳島の世帯割合を見てみましょう(図表21)。専業主婦世帯の割合が共働き世帯を上回るのは「子どもがいない」場合と「子どもが1人いる場合」です。

逆に、共働き世帯が専業主婦世帯を上回るのは「子どもが2人いる」場合と「子どもが3人いる場合」です。ここからも、徳島において共働き世帯の方が専業主婦世帯より子どもが多いということがはっきりと分かります。

図表21

| 世帯タイプ            | 世帯数     | 専業主婦世帯<br>(世帯数) | 共働き世帯<br>(世帯数) |
|------------------|---------|-----------------|----------------|
| 合計世帯数            | 308,417 | 178,892         | 129,525        |
| 子どもがいない世帯        | 38,790  | 27,482          | 11,308         |
| 子どもがいない世帯割合      | 12%     | 15%             | 9%             |
| 子どもがいる世帯         | 269,627 | 151,410         | 118,217        |
| 1名専業主婦の子どものいる世帯  | 42,408  | 33,712          | 8,696          |
| 1名共働きの子どものいる世帯割合 | 16%     | 22%             | 7%             |
| 2名専業主婦の子どものいる世帯  | 21,487  | 13,071          | 8,416          |
| 2名共働きの子どものいる世帯割合 | 8%      | 9%              | 7%             |
| 3名専業主婦の子どものいる世帯  | 30,955  | 18,851          | 12,104         |
| 3名共働きの子どものいる世帯割合 | 11%     | 12%             | 10%            |
| 4名専業主婦の子どものいる世帯  | 6,820   | 5,549           | 1,271          |
| 4名共働きの子どものいる世帯割合 | 3%      | 3%              | 1%             |
| 5名専業主婦の子どものいる世帯  | 1,334   | 871             | 463            |
| 5名共働きの子どものいる世帯割合 | 0%      | 0%              | 0%             |

資料：総務省「令和2年国勢調査」より筆者作成

専業主婦世帯は、子なし・子1人割合が高く、  
共働き世帯は、子2人・子3人割合が高い

資料：総務省「令和2年国勢調査」より天野氏作成

■離婚化35%社会で、男女共働きは当たり前

共働き世帯の方が専業主婦世帯よりも子どもが多いことに、疑問を持つ方もいらっしゃるかもしれませんが、これは皆さんや皆さんの「母ちゃん」の若い頃の話ではなく、今の若い世代の価値観に基づく話なのです。

理想に近いカップルになれた2人ほど子どもが多いなんて、当然の流れですね。

ここまでお話ししても信じていただけない方が過去にいらっしゃいましたので、実際の共働き世帯率の全国推移もお示しします。全国では、2023年の共働き率は71%と、専業主婦世帯29%を大きく上回っています。(図表22)。

図表22



徳島でも、共働き世帯は 79,680 世帯 (73.5%)、専業主婦世帯は 28,501 世帯 (26.3%) と、圧倒的に共働き世帯が多い状態です (図表 21)。

さらに、今は離婚が本当に多い時代です。10 年間で、件数ベースで見て婚姻届の 35% の離婚届が出されているのが現状です。こうした社会で求められるのは、男女関係なく経済的自立を保ちつつ支え合える仕組みです。80 年代のような専業主婦世帯前提の家族価値観から脱却し、「労働市場・雇用改革」を進めなければ、日本の未婚化は止まらず人口減も加速するでしょう。

**ポイント④**  
**「ジェンダーレス雇用」推進へ**  
 — 「男は仕事、女は家庭」価値観に  
 社会減エリアの若い男性が悩んでいる

ここで、ポイント①の理想の家族像を思い出してください。男性は「専業主婦反対派」が多かったですね。いまや、男性の年収中央値 700 万円の結婚相談所でも「専業主婦希望」の女性は最も結婚しにくいとされています。

2020 年に福岡県が行った調査でも「男は仕事、女は家庭」価値観に対し、若い男性ほど反対していました。福岡というのが重要で、福岡は 2015 年の内閣府の調査で「夫は仕事、妻は家庭」肯定派が最も多かった地域なのです。

では、5 年後の 2020 年の結果を見てみましょう (図表 23)。若い世代ほど反対派が多く、特に 18 ~ 29 歳男性は反対派が 76.3% と 8 割近い水準にまで達しています。また、同年代の女性

63.5% を上回っており、30 代でも同様に、男性の方が女性よりも反対派が多くなっています。

女性活躍推進は、未だ「女性への配慮」という誤解がありますが、「女は家庭」価値観に悩んでいるのは、むしろ若い男性だということをしっかり認識していただく必要があるでしょう。

図表23



また、この結果を見て「福岡の女性は寛容だな、4 割弱が『女は家庭』を受け入れているのか」と思った方がいるかもしれませんが、そういう話ではございません。

こうした価値観が嫌なら、地域から出て行ける時代です。後継ぎとして否応なく地元に残っている男性と、そういった縛りの少ない女性。この違いから、女性の賛成派が地方に多いように見えているだけなのです。

この男女差の傾向は、社会減エリアほど顕著に現れます。だからこそ「地元幸福度」という指標は、地元価値観があわない男女が他県へ流出してしまう社会減エリアでは、自動的に上昇する傾向にあり当てにはならないのです。

**ポイント⑤**  
**テレワークなくして、若者誘致なし！**

**■徳島はテレワーク導入が遅れている**

コロナ禍を経て、東京の雇用環境は大きく変わりました。2023 年 10 月時点では、東京では在勤者の 4 人に 1 人以上がテレワークを利用しています。

テレワークは、子育てや介護、通院、婚活など様々なライフステージと仕事を両立するための有効な手段です。しかし、徳島の状況を見ると10人に1人ほどしかテレワークを利用しておらず、東京との差が浮き彫りになっています。

某地方シンクタンクと私が実施した、20代女性へのインタビュー調査(2024年)でも、テレワークは高く評価されていました。就職先を選んだ理由にテレワークを挙げる人もいました。

■「業種アンコンシャスバイアス」を打破する

人手不足も深刻化していますから、IT化やテレワークを強化する企業は、今後ますます増えていくでしょう。「うちは製造業だし」とおっしゃる方は、図表24をご覧ください。

テレワークの利用率は業種ごとに差があります。製造業は20%をやや下回っていますが、全体の中では4位と上位に位置しています。

ところが徳島は、全業種で見ても10%に達していません(図表25)。つまり、「うちの県は製造業がメインだから」は言い訳なのです。

もう一つ、地方の問題として申し上げたいのは「女性の仕事=観光、飲食、宿泊、医療・福祉」という、アンコンシャスバイアス(無意識の偏見)が残存していることです。

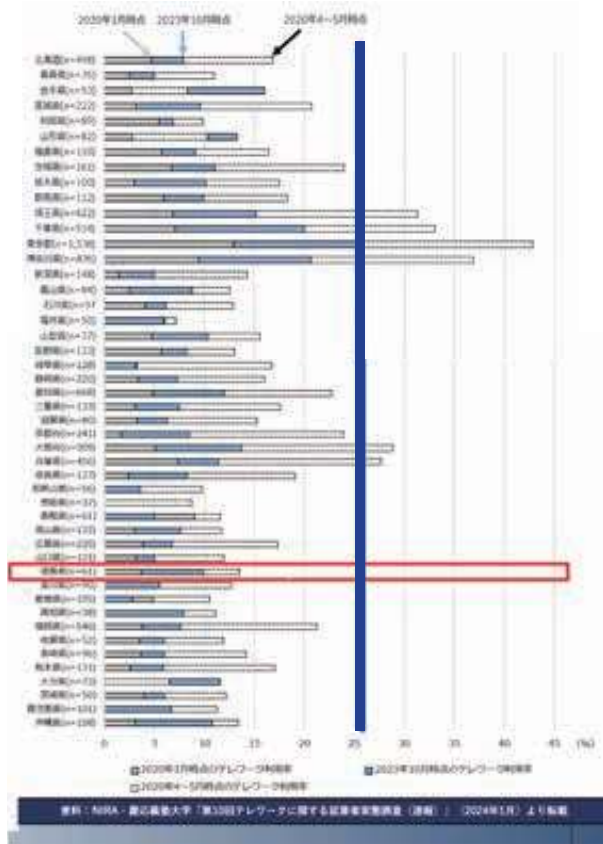
飲食業・宿泊業、医療・福祉は対面接客が多く、テレワーク利用割合が最も低い業種です。こうした時間や場所の不自由度が高い業種を地

図表24 業種別テレワーク利用率



元の「女性の仕事」と強くイメージしているのです。女性から逃げられるのも無理はありません。

図表25 居住都道府県で見たテレワーク利用率の推移



■時間と場所の柔軟性を確保する

東京一極集中が進むなか、東京の18～34歳男女が選ぶ「結婚・子育てに望ましい制度」の筆頭は、やはりテレワークです。全体の61.2%がテレワークを選んでおり、その後はフレックスタイム制(58.5%)、週休3日制(34.0%)などが続きます(図表26)。

中高年は柔軟な働き方という「時間の柔軟性」ばかりに注目しますが、いまはボーダーレスの時代ですから、しっかりと「場所の柔軟性」も配慮することが重要です。

図表26



ポイント⑥  
タテマエよりも中身が重要  
男女賃金格差是正を進めること！

いま皆さんに問いたいのは「本当に人手不足ですか？」ということです。地元の20代男性だけをメインに考えて、「若者の人手不足」とおっしゃっていませんか。

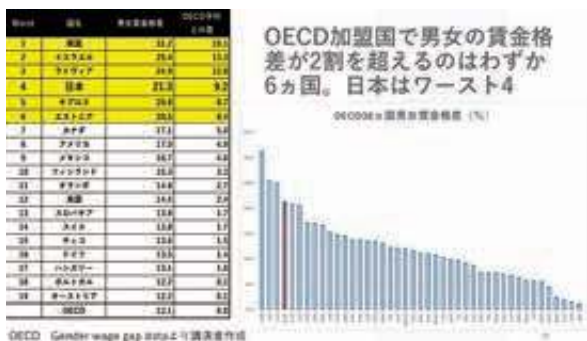
もし、女性を「サブ人材」もしくは「不要」と考える古い雇用感覚をお持ちのままなら、人手不足になるのも当然です。なぜなら今の日本は、全国の20代をかき集めても、40代の67%しかない時代に突入しているからです。

さらに、徳島の20代人口は40代人口の58%と、状況はもっと深刻です。この貴重な20代人口の半分を占めている女性の生産性を放置して、地域が発展できるはずがありません。

この現状は、日本病と言っても過言ではございません。正社員の男女の賃金格差を見ると、OECD加盟国のなかで格差が2割を超える国は、日本を含めて6か国しかありません(図表27)。

この上位6か国を見ると、民族紛争が絶えず徴兵制などがある国ばかりが並び、その間に日本がいるのです。いつまで第二次世界大戦後の雇用構造を引きずっているのでしょうか。

図表27 OECD加盟国の男女賃金格差ランキング



男女の賃金格差が2割を超える国の労働生産性は、他国に比べて低いということも分かっています。人材価値を人口の半分も捨ててしまっている訳ですから、当然の結果と言えるでしょう(図表28)。

図表28



どんな企業が選ばれるのか

最後に、どんな企業が選ばれるのか、もう少し詳しくお話ししましょう。まず重要なのは「若者採用」と「若者へのPR戦略」を最優先にすることです。制度を一生懸命整えても、PRができていなければ若者には届きません。

今の学生にとって、インターネット上の就職情報サイトの活用は常識であり、就職活動の大半がネット上で行われています。また、HPの採用ページを充実させ、募集要項やエントリーページだけでなく、CSRなど会社の公益性に関する情報も発信することが重要となります。

採用フローも大きく変化しています。いまや、WEB面接の体制がなければ採用競争に勝てない時代となり、広島などの大きな地方都市企業でも東京圏の企業に採用で負けてしまっている状態です。学生たちが地元で対面の就職活動をしながら首都圏の企業とWEB面接も同時に進めている、という状態も当たり前になりました。コロナ禍以降、首都圏の企業から先に内定を貰い対面面接しかない地元企業は辞退される、といった傾向も強まっています。

一方、地方企業でも採用に成功している事例があります。「夜勤があるので工場勤務の女性

採用は難しい」という企業(製造業)に「看護師は夜勤があるのになぜか」と指摘すると、無意識の偏見があったことに人事担当者が気づき、採用方針が変わりました。女性が多い普通高校も対象に男女問わずアプローチをしていき、今では、工場勤務の就職説明会に来る方の7割が女性で、毎年確実に女性採用ができ、女性工場勤務者離職率もゼロであるとうかがっています。



## おわりに

これまで「若者就職社会減が人口減少の真因である」とお話してきました。地方には「長男跡取り文化」が残存していますが、長男が地元に残っても地域に女性がいなければ結婚できず、跡取りも生まれません。実際、妻となる女性がおらずに跡取りなしで廃業する企業も増えていると聞きます。跡取りは長男だからと県外に手放された娘は、外で幸せに暮らしているので後で呼んでも戻らない、との話もうかがいました。

この負のループを終わらせるには、地元で働く親の姿を見て、子どもたちが男女問わず「この会社で働きたい」「継ぎたい」と思える環境づくりが不可欠です。そのためには、企業自身が「若者の価値観に基づいて」魅力的であることが求められます。

最後に「狂気とは即ち、同じことを繰り返し行い、違う結果を期待することである」という金言をお贈りします。統計を正しく認識し、ぜひ行動に繋げていただければと思います。

(本稿は、徳島経済研究所40周年記念フォーラム「少子化時代に人が集まる企業・地域のあり方」における天野馨南子氏の講演を要約・編集したもので、責任は当研究所にあります。無断転載を禁じます。)

あまのかなこ  
天野馨南子氏 ご略歴

東京大学経済学部を卒業後、1995年に日本生命保険相互会社に入社。  
1999年より同社シンクタンクに出向。専門分野は人口動態に関する社会の諸問題。  
総務省「令和7年国勢調査有識者会議」構成員等、政府・地方自治体・経済団体等の  
人口関連施策アドバイザーを務める。エビデンスに基づく人口問題講演実績多数。  
日本証券アナリスト協会 認定アナリスト (CMA)。

主な著作

〈単著〉

「まちがいだらけの少子化対策：激減する婚姻数になぜ向き合わないのか」(金融財政事情研究会、2024年)

「データで読み解く『生涯独身』社会」(宝島社、2019年)

〈監修〉

「未婚化する日本-ペアーズ共同調査と統計データが示すその傾向と対策」(編著：白秋社編集チーム、白秋社、2021年)

〈共著〉

「Before/With コロナに生きる社会をみつめる」(編著：山口幹幸・高見沢実、ロギカ書房、2021年)

ほか